

町収蔵の 生活用具(民具)と

農具

横芝光町教育委員会



はじめに

ほんの数十年前まで、千葉にはそこそこに萱葺き屋根の農家が見られたが、いつの間にかほとんど無くなってしまった。横芝光町は東京から2時間圏内とその近郊であり、一大消費地を控えた近郊農業地として発展し、東京にも通勤する人もいて、急速な農村においての都市化が進み、過去の農村風景は一変してしまった。今日、町内で茅葺き農家は数えるほどになり、絶滅危惧種と言える有様で、所有者はその維持さえ困難な状況になっていると言う。

また、駅前の商店街も寂れ、所謂シャッター通りとなって、商店街が消滅の危機に立たされている。これも時代の流れとして、放置してよいものだろうか。かつて横芝の商店街は八田金毘羅神社の門前町として、また、銚子街道の宿場町として発展した。それが総武線の開通と横芝駅の開業によって、商店街が駅前に移り、一時は地域の飲楽街として賑わった。しかし、映画館や遊廓などの娯楽施設の閉鎖に始まる衰退は、今消滅なのか、新たな発展への胎動なのか、まだ混沌としている。

このように身近なものまで移り変わり、何もかもが失われて行く中、何か後世に残して行くものはないかと考えられたのが、文化財であり今日文化遺産と言われるものである。文化財とは人間が營みの中で造り上げた全てのものであり、また、營みの中で関わる周りの環境—自然—も含まれる。しかし、その全てを遺せるわけではない。その中で貴重なもの、重要なものをはじめとして、遺せるものを選択して取り上げたのが文化財であり、文化遺産である。

ここに収録したものは、これまで町に町内から寄贈された町民にとって最も身近なもので、つい最近まで使われていたものが多い。従って決して文化財として貴重とか重要なものではないけれども、使っていた人々にとっては最も愛着があり、懐かしいものである。そうした文化財もあっても良いと思う。



上総の農家（房総のむら）

1. 生活用具（民具）

生活用具とは、我々が普段の生活の中で使っている道具であり、その範囲は一番身近な衣食住に係るものから、文房具や遊び道具なども含みます。衣では着るものそのものから、それを造る裁縫道具、大きいものではミシンもあります。食では鍋釜の調理用具から、茶碗や皿などの食器があります。住では最も大きいものは家のものですが、それに付属するもの、例えば炬燵やちゃぶ台などの家具、布団等の寝具がこれに入ると思います。中にはどれに入るか、あるいは兼ねるものもあると思います。ここではそういうものの洗い出してみました。

(1) 衣。着るものに係る道具

火熨斗、焼き鎧、炭火アイロン

火熨斗は、江戸時代に中国から伝わったと言われ、明治の頃まで使われ、柄杓のような形の銅製で、中に炭を入れて暖め、布に当てて伸ばすことから、この名がついた。熨斗は当て字である。火熨斗は7点有り、内2点は渕が内側に折れ、5点は渕が外に開く。1点鉄製の火熨斗台がある。

焼き鎧は、江戸時代に伝わり、昭和まで使われ、槍のような形で、先端を炭火等で暖め、布の細かい部分を伸ばすのに使う。

炭火アイロンは、明治に西洋から伝わり、今のアイロンと形はあまり変わらないが、身の中に炭火を入れ、暖めて使う。前方に煙突があるのは空気入れで、日本独特のもの。



手回し洗濯機

この宇宙船のようなものは、昭和32年、「カモメホーム洗濯機」として販売された手回し洗濯機である。無銘の発明家高月昭雄氏が、結核を押して家事をこなす奥さんの為に発明したと言われるが、国内では高価であまり売れなかったが、欧米で人気があって、30万台が輸出、販売されたと言う。

写真は回すハンドルがなくなっている。



カモメホーム洗濯機
径32×高36cm

盥（たらい）

このような形のものは、一般的に小さく深めのを桶、大きく浅めのを盥と呼んだ。盥には洗濯板をかけて選択をしたり、夏の暑い時には水を溜めて、行水をしたものである。盥の素材は、目の詰まった上質の檜材が使われ、新品はその匂いがよかつた。たらいはてあらいが訛ったと言われる。



径59×高24cm

足踏みミシン

日本にはミシンが幕末には入って、明治13年には国産第1号ができ、大正の頃に量産が始まったと言われる。下の左はシンガーの昭和20年代の製品と思われる。右は本体が明るい色になり、三菱の昭和40年台頃のものと思われる。



・ ジューキミシン
幅121×奥行42×高100cm



三菱ミシン
120×42×97cm

下駄

下駄は日本独特の履物で、古代からあったことが遺跡の発掘や平安の絵画などに出てくる。そのため様々な形や呼び方など地域によって色々である。下は女性用の下駄で、歯を付け替えることができる。右2点はぼっくり下駄、あるいはおぼこと呼ばれ、少女用の下駄で、い草の敷物と側面の塗りから、良いものである。



22.5×9×7.5cm



18×8×6cm

傘

傘には江戸時代から造られ始めた和がさが有り、細くて軽い蛇の目傘と太くて重い番傘とがある。左の写真は傘面に黒と赤の油紙を輪模様に貼付けた蛇の目傘で、柄も細く、女性用の傘である。これ以外にも2点收藏するが、いずれも程度はよくない。



蛇の目傘 径63×柄長70cm

(2) 食 調理、食事用具

飯炊き釜（羽釜）

この飯炊き釜は、胴の中央に鍔が付いているところから羽釜とも呼ばれる。鍔は竈に載せた時のひっかけになると同時に、下からの熱を留めて保温性を高める役割がある。羽釜は当初土器であったが、後に鉄製に、そしてこれはアルミ製である。この釜には下駄のような蓋をかぶせて、ご飯を炊くと程よくご飯ができ、おいしい。



アルミ製飯炊き釜（羽釜）口径26×高22cm

臼と杵

臼と杵は餅をつく時の一对の道具で、写真的白は木製であるが、石製もある。木の臼は櫛材が使われることが多く、大きいものだとかなり重い。

臼径50×高48cm

杵本体径13.5×長43×柄長84cm



臼と杵



臼 径31×高19cm

臼は主に穀物の粉を挽く道具で、上臼と下臼の一対からなり、上下臼が重なる所に両方ともに刻み目が入り、上臼の中央より端寄りに穴が穿たれ、そこに引くものを落としながら上臼を回すと、臼の間から惹かれた粉が出てくる。臼の石材は花崗岩が多い。これも花崗岩である。

食器、陶磁器皿・蕎麦猪口・丼鉢

一昔前の食器と言えば、陶磁器の皿と漆器の碗が主であった。皿でも安価な瀬戸製の石皿や鉄絵皿、少し高価な染付けの皿や蕎麦猪口、色絵の手塩皿、丼鉢などは肥前(有田、波佐見)か瀬戸製品である。いずれも江戸から明治末のものと思われる。この江戸期の発掘品ではくらわんか碗が多いが、民具として伝世したものは無い。下の漆器膳セットは黒塗りで法事用のものである。



瀬戸製石皿 径32cm



瀬戸製鉄絵皿 径24.5cm



口紅染付け八寸皿 径24.5cm



染付け5寸皿 径15.5cm



染付け楕円皿 17.5×14cm



染付け蕎麦猪口



染付け角皿(本来は5枚組) 15.5×10.3cm



色絵丼鉢



漆器法事用膳セット

徳利(通い徳利)

写真は通い徳利と呼ばれる一升徳利で、江戸中期に一般化した酒屋が酒を売り出す時に貸し出した容器である。入れ物は主に美濃製陶磁器で、胴に酒屋の名前が鉄釉で書かれ、酒飲みはこれを持って酒屋を往復した。

鉄瓶

鉄の鋳物製で、持ち手の弦と注ぎ口が付いた湯沸かしを鉄瓶と言い、弦や注ぎ口が無い茶釜と区別される。また、小さく火に掛けないものは急須である。



鉄瓶
径15.5×高20cm



鉄瓶 19×28cm

飯櫃

飯櫃は、炊きあがったご飯を釜から移し、食卓へ持つて行く容器で、木でできていることから余分な水分を取り、ご飯をおいしく保つことができる。木は檜材が使われ、その殺菌力によってご飯の腐敗を防いだ。下の左は五合入れで、右は一升入れである。家族の人数によって、使い分けられたのであろう。



五合入飯櫃
径21×高16cm



一升入飯櫃 28.5×24cm

(3) 住一家具など

① 暖房具

家具としての暖房具は火鉢や炬燵(こたつ)、行火(あんか)、湯たんぽなどがある。

置き炬燵

写真は置き炬燵と呼ばれるもので、cm四方に高さ cmの木の檜の中に、炭を入れた火入を置き、布団をかぶせて暖をとったのである。置き炬燵は江戸中期に広まり、火入れと檜が一体になっているため、どこでも移動できて便利であった。



置き炬燵 方33×高31cm

火鉢

火鉢は、火を起した炭を入れて暖まる器具で、木製の枠のものと、陶磁器製のものがある。写真左は庶民用のもので、右はつい寧な造りで武家用のものであった。中に五徳を置き、その上に鉄瓶を置いて湯を沸かすことができた。



木製火鉢 方42×高25cm



置き炬燵 32.5×30.5cm



木製火鉢 30×28cm

行火(あんか)

行火は、写真の瓦質土器製のものは炬燵と同じ用途で、炬燵が家族用で、行火が一人用であった。中に炭を入れた火入れを置いて暖めた。

湯たんぽ

湯たんぽは、体を温めるため湯を入れる容器で、日本では室町期に陶器製が伝わり、大正期に金属製が現れたが、戦時中に金属不足でまた陶器に戻った。



瓦質土器製行火
方25×高25cm



陶器製湯たんぽ
長25×幅22×厚10.5cm



陶器製火鉢
径25×高25cm

② 家具

行李(こうり)

行李とは中国語で荷物を意味し日本では竹や柳で編んだ葛籠(つづらかご)の一種で、衣類や文書、雑物などを入れた家具と言える。写真は竹行李で、薄く裂いた竹を3本束ねて網代編みして造ったもので、結構丈夫である。



竹行李 縦60×横37×高23cm

④ 灯火用具(照明器具)

電気が無かった時代、あかりは火を灯して照明とした。室内では行灯や燭台、ランプ、外出用には提灯があった。



提灯 径26×高30cm



吊り下げランプ
拿径31×高42cm



置きランプ
高36cm



銅製燭台
高60cm



竹製燭台
高56cm

⑤ 娯楽用具

蓄音機

まだ電気式で音楽を再生できなかった頃、エジソンが螺旋蓄音機で初めて音を記録し再生することに成功した。その後、円盤式のレコードが生まれ、その再生に使われたのが、写真のような蓄音機である。下の箱の中にゼンマイがあり、それを巻いて上の回転盤が回る動力とし、それにレコード盤を載せ、溝にはまる様に鉄製の針が付いた再生機當てると、上のラッパ状の拡音器から音が拡大して聴こえた。写真の蓄音機は銘板等が付いてないので不明であるが、形から明治40年代のものに良く似ている。今はゼンマイ等が破損しているため動かない。



ゼンマイ式蓄音機

拡音器径49cm
長55cm
台方39.5cm
全体高67cm

2. 商工業用具

収蔵する民具の中には、普段の生活とは異なった、いわゆる商いや手工業的な生産に係る用具がある。例えば秤や算盤、養蚕や機織りなどがそれである。それらは各農家の間で細々と營まれたり、生産品の取引に使われたり、各集落にあった商家などで使われたものであろう。ここではそういうものと取り上げた。

(1) 養蚕と機織り

二角式製簇器 (にかくしきせいぞくき)

この辺もかつては養蚕が盛んで、あるお寺に蠶子尊の扁額でその名残を見ることができる。この二角式製簇器は蚕の飼育床(まぶし)を造る道具で、3機収蔵するが、ほかに養蚕関係の道具はない。



幅40×高59cm



39.5×57cm



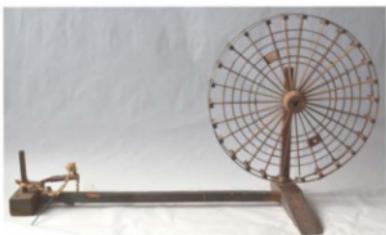
40×57cm

糸車(糸紡ぎ車)

綿花や蚕繭から纖維を取って、撚り合わせ、糸を作る道具で、同様な糸車が世界各地にある。その構造は小さな紡錘と大きなはずみ車と、それを調べ糸が繁ざ、右手ではずみ車を回す間に、紡錘が何回も回って、纖維が撚られて紡錘に撚られた糸が巻き取られるようになっている。はずみ車は最初竹で作られていたが、より頑丈な木製から自転車の車輪を利用したものもある。



①竹製はずみ車の糸車 台長88×幅42×車径52cm



②竹製はずみ車の糸車 88×42×51cm



上の糸車に付けられた捺印



③木製はずみ車の糸車 78×36×50cm



④自転車輪を利用した糸車 109×36.5×60cm

座縫り機

燃りをかけて紡いた糸を巻き返したり、織り機に掛ける前に糸束を作る道具。糸車で燃って出来た糸は、紡錘の軸に紡ぎ玉として巻かれ、この後、糸を染めたり、糊付するため、糸束にするため座縫り機か縒(かせ)で糸束を作る。縒で作った糸束は、染色、糊付の後、座縫り機で横直す。



②木枠が付いた座縫り機 43.5×38cm



①糸が巻かれた座縫り機 幅44×高35cm



方10.5×幅20cm

糸巻き木枠



③座縫り機 43×33.5cm



④座縫り機 43.5×30cm



丑首

糸巻き用具

糸を幕用具には前に座縫り機を紹介したが、そのほかに丑首、紹台などがある。また、滑車の付いた大形の糸巻き木枠がある。紹台は糸を染め易い様に、糸束を大径に巻き直す器具である。またその逆の座縫り機に巻き直す時の、糸掛台でもある。



滑車の付いた木枠
幅30×高38cm



紹台(かせだい) 幅65×高88cm

機織り器の部品

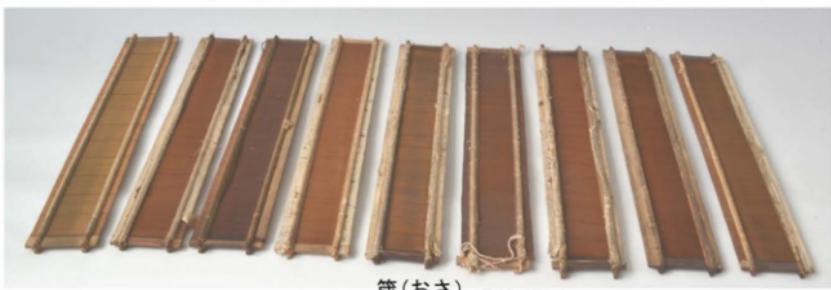
機織り機本体は無いが、その部品にあたる簀と杼がある。簀は縦10cmほど、幅30cmほどのあまり大きくないもので、間に竹で細かいスリットを入れ、その中に経糸を通し、織る時に緯糸を押さえるのである。杼は船のような形をし、中が空いていて、右の緯糸巻を入れ、経糸の間を滑らす様に緯糸を通すのである。



杼(ひ) ⑤長25.5×4cm



緯糸巻(よこいとまき)



簀(おさ) 長44×8cm

(2) 商売用具

算盤(そろばん)

算盤は指で珠を移動して計算ができる計算機で、その起源は古いとされ、日本には室町時代に伝來したと言われている。現在の算盤は天に1つ、地に4つの珠で構成されるが、右の算盤は天に2つあるもの、地は皆5つ珠である。天に2つあるのは中国伝来そのまままで、昭和になって地の4つ珠が普及した。であるから右のは皆昭和以前のものと思われ、また、商売用であったものであろう。

矢立(やだて)

矢立とは、筆と墨壺とを併せた携帯用の筆記用具で、中世に陣中で使うため、筒などに入れ携帯する「矢立の硯」から由来する。

竿秤(さおばかり)

竿秤は、メモリの付いた竿に、先端に団るものを載せる皿が付いたり、つり下げる鍵が付き、錘を竿に掛けて計る道具である。小さいものは20cm程度から、大きいものは竿が1mもあるものもあり、計るものによって使い分けたのであろう。



竿秤用分銅



天1地5珠算盤 ③縦11×横33×高3cm



矢立 ①長19×幅2cm
②18.5×2.5cm



様々な竿秤 ①長55.5×皿径13cm ②40cm ③24.5×8.8cm
④22cm、外25×7.5cm ⑤56cm

升

容積を量る道具としては升がある。升には一合、五合、一升、そして一斗などがあり、多くは木製である。



一升升



一斗升 径32×高32cm



①縦30×横18×高19.5cm



②27.5×18.5×19.5cm



③44.5×28×27cm
錢箱のいろいろ



④54×30.5×31cm

流通用容器

酒、醤油、菓、油などの液体製品の流通には、陶磁器製甕や木製樽などが使われた。



磁器製酒甕
径31×高39cm



常滑製醸造製品用甕
30×43cm



木製樽

3. 農具

(1) 起耕用具

犁(すき)

犁は牛や馬に引かせて、土を起こし、耕す器具で、地域、時代によって形が変化している。



鍬(くわ)

鍬は、柄の先に90度以内の角度を付けた刃を持ったもので、土を起こしたり畝を作ったりする道具で、刃が長方形の平鍬と3～4又に分かれた備中鍬とがある。



①身長41×幅28×柄長76cm



②40×26×76cm



③40×28×76cm



④37×16×82cm



⑤40×25×76cm



⑥42×29×75cm



⑦43×12×76cm



平鍬

⑧38×15×76cm

備中鍬(びっちゅう うぐわ)



鋤(すき)

鋤は、柄に直線的に刃を付けた道具で、土を深く起こすのに使われた。

えぶり

えぶりは、柄の先に直角に棒状の刃が付いた板を装着した道具で、田の表面をならすのに使う。

手馬鋤(てまんが)

手馬鋤はえぶりより長い刃が付いていて、手で振り回しながら土をより深くならす道具。

鋤 幅11×長120cm



①身幅53×高14
×柄長200cm えぶり

②45×11
×200cm

手馬鋤

幅33×歯長21cm

(2) 水利用具

水汲み桶と足踏み揚水車

畑の灌漑には水汲み桶を使い、大量の水が必要な水田には足踏み揚水車が使われた。これは、桶と水車が一体となった道具で、水車に乗って足で水車を踏みながら回し、水を汲上げて桶に流し、水を水路から田に汲み揚げる。



水汲み桶と天秤棒



13枚羽根水車
高148×長178×幅33.5×車径128×車幅26cm



揚水作業

小柳慎氏画



17枚羽根水車
106×148×33.5×146×24cm

(3) 水田農耕用具

水田耕作は、ぬかるんだ土と水との格闘であり、それに専用の道具が必要であった。また、作業は必然的に夏であるため、雑草の繁茂と夏の日差しとの格闘でもあった。馬鍬や耙、田下駄などは古くからある道具であるのに対し、草取り機は明治以降に発明、改良された道具である。



田の草取り作業



馬鍬(まんが)
幅118×72cm



田の草取り機



えぶり



陽蓑(ひみの) 40×78cm



蓑(みの)
幅96×長70cm



田下駄(たげた) 21×43cm



大足(おおあし) 28×84cm

(4) 収穫用具

千歯扱き

千歯扱きは江戸元禄期に和泉国で発明され、昭和まで使われた脱穀機である。木の台に鉄製の櫛状の歯が水平に突き出し、歯は20~30あり、直線と弧を描いて付いているものがある。



②59×71cm



④60×58.5cm



①幅60×高71cm

③61×62cm



千歯扱きでの脱穀作業

足踏み式脱穀機

足踏み式脱穀機は大正期に出て、千歯扱きに代わって普及した。写真のものはだいぶ傷んでいるが、鉄製の大きな銘板が付き、古いものではないと思われる。



幅72×奥行64.5×高65cm

(4-2) 収穫用具

穀物の収穫には、田畠で収穫した穂鞘から穀物を分離収集する道具にもいろいろあり、改良が加えられて行つた。



唐箕(とうみ)
長150×幅37×高120cm



明治の頃の脱穀作業



唐棹(からざお)



篩(ふるい) 径59×高14cm



納屋の農具 (房総のむら)



箕(ざる) 57×33cm

(5) 葦製品製作機 筵編み機

筵は、様々な用途があるため、かつては各農家で作っていた。筵編み機は台に立てた2本の木に、ほぞ穴を開けた横木を上下に渡し、その間に簾を通した繩を経糸として上下に張り、横に葦を入れながら、筵を編んだ簡単な機械である。



①幅157×高100cm



筵編みの実演写真



②167×125cm



筵編みの絵(小柳慎氏画)

こも編み機・俵編み機

右の写真是こも編み機、あるいは俵編み機と思われ、上下が別々のものか、セットになって使うものか。



表



裏

120×44cm

(6) 運搬用具、その他

農作物を収穫した後、収納するなどの運搬がある。運搬には今日でこそトラックが使われるが、それが無かった時代には、大八車や荷車に載せ、馬や牛に引かせて運んだ。また、それが無いところで人は人が背負って運んだ。



馬齧



馬の轡

鐙



油を搾った後の大豆滓を、
これで削り切り、堆肥とした。

おわりに

ここに収録した民具(生活用具)や農具は、町に寄贈され収蔵している物で、種類によって数に偏りがあったり、使用に際して組み合わせる物(セット)が、必ずしもそろっていない物がある。そのため物によっては何に使うか分からぬ物があったり、そのものの物語(ストーリー)が作れない物もある。収蔵した民具等は多数になるが、未だに整理してなく、名称等で不明な物もある。

今後も民具等の寄贈を受けると共に、それらの調査・整理をして、展示に耐え得る様に充実を計って行かねばならない。民具等の中では寄贈者名も分からなくなっている物があるが、これまでに御寄贈頂いた方には、この場で感謝申し上げます。



村の鍛冶屋(房総のむら)



下総の茅葺き農家(房総のむら)



昔の台所(房総のむら)

本書の執筆・編集は横芝光町教育委員会社会文化課生涯学習班道澤明が担当した。これの文責は道澤に帰す。



町収蔵の生活用具(民具)と農具
発行日 平成29年3月20日
編集・発行 横芝光町教育委員会
印刷